秋田県立大学総合科学研究彙報　第21号（2020）：11－16

「日記」か「日誌」か

― キェルケゴールの journal をめぐる小論 ―

鈴　木　祐　丞

本稿では、キェルケゴールが書き残した journal[1]を日本語で「日記」と呼ぶべきかそれとも「日誌」と呼ぶべきかという、ごくささいな、それでいて彼の理解にいくばくか寄与しうる問題について論じてみたい。

1

デンマークの思想家セーレン・キェルケゴール（Søren A. Kierkegaard, 1813-55）は、著作と並行して journal を書き続けた。Journal とは、「AA」から「KK」（「II」は存在しない）と題されたノート（1835年から1846年）と、「NB」から「NB36」と題されたノート（1846年から1854年）、合わせて46冊のノートの総称である。その内容は多岐にわたるが、日々の身近な出来事や社会的な出来事の記録、それらについての所感、著作の計画や下書き、著作活動の戦略についての省察、キリスト者としての自分の生き方をめぐる思索などが中心である[2]。最新版原典（デンマーク語）全集（*Søren Kierkegaards Skrifter*（*SKS*）[3]）では、著作が計16巻、約6,000頁であるのに対し、journal は計12巻、約5,000頁におよぶ。もちろんすべて、基本的に彼の母語デンマーク語で書かれている。

キェルケゴールの思想にかかわる研究は、比較的近年にいたるまで、journal を軽視し、著作を重視して進められることが多かった。だが1990年ころを境に、journal は著作と同等の重要性をもつ研究資料として認識されるようになってきている。こうした journal の地位向上の動きには、コペンハーゲン大学セーレン・キェルケゴール研究所の前所長ニールス・カペローン（Niels J. Cappelørn）の存在が深くかかわっている。約言すれば、彼は、journal をキェルケゴールの文学活動（literaly activity）の一環として認識すべきことを強く主張したのである[4]。たしかに、キェルケゴールは journal を、後世が自分の著作活動全体（ある著作がなぜ、何のために書かれ、出版されたか）を理解するのに必要不可欠な情報源として位置付け、死後の出版を前提にその記述を進めていたように思われる[5]。実際それを裏付けるかのように、彼は一度書いた内容を後日書き換えたり、フィクションを交えて描写したり、読まれたくない頁をまるごと切り取ったりと、いわば内科的・外科的と形容しうるような処置を journal に加えていたことが判明している[6]。カペローンは上述のキェルケゴールの最新版原典全集（*SKS*）の刊行に編集者の一人として深く携わり、彼のこうした journal 観は *SKS* の構成に鮮やかに反映されることになった。*SKS* は、約150年のキェルケゴール研究史上はじめて、「キェルケゴール全集」のなかに journal を収録したのである。しかも膨大な journal のすべてを、彼が整えたままの状態を再現する仕方で。さらにカペローンは、*SKS* の刊行にあわせて、自ら編集を務める国際的学術誌 *Kierkegaard Studies Yearbook* の2003年号[7]で、journal の活用（方法）をテーマとする特集を組んだ。こうして1990年代以降、カペローンらの尽力により、journal はキェルケゴールの理解のために欠かすべからざる資料であるという認識が、研究者のあいだで定着してきたのである。

デンマークで引き起こされたこのような journal の地位向上の動きは、すぐに他の国々へと広まっていった。ドイツとアメリカでは、

これまで不完全にしか刊行されてこなかったキェルケゴールの journal を *SKS* に準拠して全訳、出版するプロジェクトが目下進められている[8]。

そしてこの波は今、ようやく日本にまで到達しつつある。現在、筆者が中心となり、デンマーク語の読解が可能な十名以上の哲学・思想系の研究者が集まり、journal のなかから重要なエントリーを厳選し、全体の大部（30％ほど）を邦訳し出版するプロジェクトが進行中である。計画通りに進めば、以文社から、計五巻（各巻A５判約500頁）の本として、2025年度より順次出版の予定である。これにより、いわばキェルケゴールの等身大の思想へのアクセスが、多くの日本人にとってはじめて可能となる。

本稿が考えようとしているのは、その本の邦題についてである。『キェルケゴールの日記・ノート』がよいのか、それとも『キェルケゴールの日誌・ノート』がよいのか。（「ノート」は彼が書き残した journal とはまた別種の媒体で、大学での受講記録や読書記録などである。）

2

キェルケゴールは AA から KK、NB から NB36の46冊のノートを一貫して「journal」と呼ぶ。デンマーク語で「journal」と意味的に類似する単語に「dagbog」（英語に直訳すれば daybook）があるが、キェルケゴール自身が「journal」を用いている以上、デンマーク語ではそれらのノートをめぐる適切な呼称の問題はそもそも存在しないわけである。

一応ここで、デンマーク語の「journal」とはそもそもどのような意味をもつ語か確認しておこう。1700年から1950年までのデンマーク語を扱う歴史的な辞書、*Ordbog over det danske Sprog*（*ODS*）[9] で「journal」をひくと、キェルケゴールはおおよそ次のような意味でその語を用いていたことがうかがい知られる。

（1-1）出来事や経験が日々書き込まれる（私的使用のための）本。
（1-2）事業や活動に関する情報が日々書き写される本。
（２）定期的に刊行される、知的な内容の媒体。のちに娯楽的な内容も含まれるようになる。

なお同じく *ODS* によれば、「dagbog」は基本的にこれらのうち（1-1）（1-2）の二つの意味だけを持っていたようである。だから（２）の意味が「dagbog」にはない「journal」固有の意味だったということになる。

するとキェルケゴールが46冊のノートを「dagbog」ではなく「journal」と呼んだのは、それらが、日々の出来事や経験、また事業や活動についての記録であったとともに、知的な内容を多分に含む伝達媒体だったから、と考えるのが妥当であるように思われる。先述の journal の内容、またカペローンの journal 観――文学活動（literaly activity）の一環としての journal――を考えあわせれば、彼がそのような意味をこめて「journal」を用いたとする推察は、おおむね納得のいくところだろう。

3

キェルケゴールは46冊のノートを「journal」と呼んだが、それは当時のデンマーク語という記号体系においてのことである。「journal」を他の言語に翻訳しようとするとき――より正確に言えば46冊のノートの呼び名を他の記号体系において与えようとするとき――、当然のことながらいささかの問題が現れてくる。

まずデンマーク語と同じくゲルマン語派に属する英語への翻訳について考えてみよう。

「Journal」の英訳の候補として、「journal（英）」と「diary」がある。*Oxford Dictionary of English* によると、「journal（英）」の意味（本稿の議論と関係のあるものに限定）として、以下の二つがあるようだ。

（１）特定の主題、あるいは専門的活動をあつかう新聞や雑誌。
（２）個人的性質のニュースや出来事についての日々の記録。

なお「diary」はこれらのうち（２）の意味だけをもつとされている。

「Journal」の意味は、「diary」はもとより

「journal（英）」とも合致しないわけである。だから「journal」の英訳にあたっては根拠にもとづく選択が必要となってくる。

これまでの英訳版がどちらを使用しているか調べてみると、主だったところでは、1960年に出版されたローデ（Peter P. Rohde）による抄訳 *The Diary of Søren Kierkegaard*[10] 以外は、すべて「journal（英）」という語を使用していることがわかる。*SKS* に準拠して目下英訳が進められている、カペローン、キアムセ（Bruce H. Kirmmse）、ハネイ（Alastair Hannay）らが編訳をつとめる *Kierkegaard's Journals and Notebooks*[11]（*KJN*）もそうであるし、*KJN* 以前の代表的英訳版であったホン夫妻（Howard V. Hong and Edna H. Hong）による抄訳 *Søren Kierekgaard's Journals and Papers*[12]もしかりである。

ではなぜ「journal」の英訳として、「diary」ではなく「journal（英）」が選択されてきたのだろう。すぐに思いつく素朴な理由としては、「journal」と「journal（英）」は、それぞれが属する記号体系は異なるとしても、語源的に同一であるのだから、「diary」よりは親縁的だから、ということである。実際、46冊のノートについて、それらの内容や、それらがキェルケゴールの文学活動の一環であったことを思い起こせば、それらがデンマーク語で「journal」と表現されるのが適切だったように、英語でも「diary」よりは「journal（英）」と表現されるほうが適切であるように思われる。

ただ、現在、英語圏の研究者が「journal」に「diary」でなく「journal（英）」をあてるのを常としているのは、このような釈義的選択をそれぞれの研究者が行ってのことというわけではなく、最新版の英訳である *KJN* に反映されている、カペローンの選択の影響によるところが大きいようである。そこでカペローンがなぜ「journal」を「journal（英）」と英訳するか、確認してみよう。じつはその最大の理由こそ、先述の彼の journal 観なのである。つまり46冊のノートは、「実際のところ、現実の diaries といったものというより、キェルケゴールの文学活動の一環」[13] だから、「それらがある種の文学（literature）」[14] だから、ということである。カペローンの見るところ、キェルケゴールは日々の出来事や著作活動についての省察などを、46冊のノートにただそのまま記録したのではなく、後世の読者の目を十分に意識して、いわば読み物として再構成してそこに描き出したのである。見方を変えれば、それは、「journal は間違いなく、キェルケゴールが自分のことをどう見ていたかを理解するための、われわれにとってもっとも重要な資料」[15] だということである。だからそのような性質の媒体であることを表現するのに「diary」ではどうしても足りないのである。

4

さてそれでは、「journal」はどのように邦訳すべきだろうか。

これまでの journal の邦訳版では、「日記」か「日誌」に判断が分かれている。たとえば玉林憲義・久山康の抄訳では『キェルケゴールの日記』[16]、橋本淳の抄訳では『セーレン・キェルケゴールの日誌』[17] としている。『新キェルケゴール研究』などの学術誌に収録されている日本語の研究論文を見てみると、現在の研究者のあいだでは「日誌」がやや優勢といった状況であるようだ。

あくまで私見だが、どうも日本人研究者の頭には、「journal」=「journal（英）」＝「日誌」、「dagbog」＝「diary」＝「日記」という等式が存在しているように思える。ここまで確認してきたように「journal」は「journal（英）」と同一視できないし、「dagbog」を「diary」と同一視するのもおかしいし、また下で確認するように前二者は「日誌」と同一ではないし、後二者は「日記」と同一でもない。当たり前のことだが、「日記」と「日誌」、それぞれがどのような意味か確かめたうえで、「journal」と置き換えるものとしてより適切な方を選ぶべきだろう。

というわけで、ここで国語辞典をひいてみよう。大修館書店の『明鏡国語辞典』によれば、「日記」の意味は次のとおりである。

（1）毎日の出来事や感想などを一日ごとに書き記した記録。日録。ダイアリー。
「―をつける」「絵―」
（2）毎日の記録を書き記す帳面。
「日記帳」の略。

「日誌」はこうである。

毎日の出来事などを書き記した記録。また、その帳面。
「業務［学級・航海］―」
日記よりも公的なものをいう。

改めて確認すると、キェルケゴールが書いたAA から KK、NB から NB36の46冊のノートの内容は多岐にわたるが、おもに、日々の身近な出来事や社会的な出来事の記録、それらについての所感、著作の計画や下書き、著作活動の戦略についての省察、キリスト者としての自分の生き方をめぐる思索などであった。そしてカペローンによれば、それらはキェルケゴールの文学活動の一環だった。このような46冊のノートを一括して表現する名称として、キェルケゴールは「dagbog」ではなく「journal」を選択したのだった。

まず言えそうなのは、そのような「journal」と等価の語として用いるには、「日記」も「日誌」も一長一短ということである。（だから日本語でもいっそそのまま「ジャーナル」と使いたくなるが、その語はその語で「日刊新聞。また、定期刊行の雑誌」（『明鏡国語辞典』）という意味が定着しているようであり、それも難しい。）

そこでまず、46冊のノートの内容に着目し、どちらがより適切か考えてみることにする。すると、どちらかといえば「日記」と表現するほうがよいように思われてくる。というのもそれらは毎日の出来事などの記録ではあっても、公的な記録（学級日誌のような）ではなく、やはり感想なども含めた記録だからだ。そしてさらに、カペローンの journal 観に注目したい。彼によれば、キェルケゴールは日々の出来事や著作活動についての省察などを、ただそのまま記録したのではなく、後世の読者の目を十分に意識して、いわば読み物として再構成して46冊のノートに描き出したのである。その意味でそれらは「ある種の文学」なのであった。ここで思い浮かぶのは、「日記文学」（「日記の形態をとった文学の総称」（『マイペディア』）という日本語である。たとえば日記文学の一つされる、菅原孝標女の『更級日記』には、彼女の13歳から約40年のあいだの人生が描き出されている。『更級日記』は日記の形態をしている（日々の出来事や、それについての所感などが（回顧的にではあるが）時系列に沿って書かれている）わけだが、それはただの記録（備忘録）ではなく、むしろ（『源氏物語』などの物語に大きな影響を受けた）作者による自らの生の文学的表現だったと思われる。つまり、日本語の「日記」は、『更級日記』などのように「日記文学」という概念にも接続可能な意味合いを持つ語であり、キェルケゴールの46冊のノートは『更級日記』のような「日記文学」の一種として見ることが可能[18]であって、それゆえこの点からも46冊のノートの日本語表現としては「日誌」より「日記」のほうが適切であるように思われるのである。総じて「journal」は「日記」と邦訳されるべきではないか。

5

というわけで、2025年度から出版予定の journal の抄訳の邦題は、『キェルケゴールの日記・ノート』にしたいと考えている。

註

[1] この箇所も含め、本稿中の「journal」はデンマーク語である。英語の場合は「journal（英）」と記して区別する。

[2] ニールス・J.・カペローン「セーレン・キェルケゴールの新版全集の刊行」、橋本淳訳、『神学研究』、第45号、1998年、94頁、および Niels J. Cappelørn, "The Retrospective Understanding of Søren Kierkegaard's Total Production," in *Kierkegaard: Sources and Results*, ed. by Alastair Mckinnon, Ontario: Wilfrid Laurier

University Press, 1982, p. 28参照。

[3] *Søren Kierkegaards Skrifter*, bd. 1-28, K1-28, udg. af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Anne Mette Hansen og Johnny Kondrup, København: Søren Kierkegaard Forskningscenteret og G. E. C. Gads Forlag 1997-2013.

[4] Cappelørn, op. cit., pp. 22-28.

[5] このあたりの事情について、詳細は鈴木祐丞編訳『キェルケゴールの日記――哲学と信仰のあいだ』、講談社、2016年の「試論――新しいキェルケゴール理解へ」参照。

[6] 詳細は鈴木祐丞「日記における信仰をめぐる思索のフィクション性について」、『新キェルケゴール研究』、第14号、2016年、39-50頁参照。

[7] Niels J. Cappelørn, Hermann Deuser and Jon Stewart (eds.), *Kierkegaard Studies Yearbook 2003*, Berlin: Walter de Gruyter, 2003.

[8] Niels J. Cappelørn, Hermann Deuser, Joachim Grage und Heiko Schulz (Hrsg.), *Søren Kierkegaard: Deutsche Søren Kierkegaard Edition*, Berlin: Walter de Gruyter, 2005-. Niels J. Cappelørn, Alastair Hannay, Bruce H. Kirmmse et al (eds.), *Kierkegaard's Journals and Notebooks*, Princeton: Princeton University Press, 2007-.

[9] https://ordnet.dk/ods.

[10] Peter P. Rohde (tr.), *The Diary of Søren Kierekgaard*, New York: Philosophical Library, 1960.

[11] Cappelørn, Hannay, Kirmmse et al (eds.), op. cit.

[12] Howard V. Hong and Edna H. Hong (eds), *Søren Kierekgaard's Journals and Papers*, Indiana: Indiana University Press, 1967-1978.

[13] Cappelørn, op. cit., p. 28.

[14] Ibid., p. 25.

[15] Ibid., p. 26. 付言すると、このようなカペローンの journal 観は、彼が提唱するキェルケゴール解釈の方法論と密接に結びついている。カペローンは「前を向いて生き、だが後ろを向いて理解する」というフレーズを、キェルケゴール理解のための鍵として掲げる。彼の考えを要約すると次のようになる。キェルケゴールはキリスト者として、神の意志がどこにどのように存在するか手探りしながら生の歩みを進めていったが、彼はもちろん使徒ではないので、明確に示された神の意志を導きの糸にすることはできなかった。彼にとって神の意志は、そのようにして自分が進んできた生の道のりを、回顧的に振り返るところにはじめて姿を現すものだった。このように彼は、つねに未知なる神の意志についてのおそれとおののきの中で生の歩み（著作活動がその中核）を進め、だが回顧的に自分が神に導かれていたことを明確に自覚したのである。彼の journal や著作活動についての省察の書（『わが著作活動の視点』など）には、このような彼の生の歩みにかかわる記述が多く見られ、われわれとしてはこれらを起点としてキェルケゴール理解を進めるのが適切である。つまり「キェルケゴールを解釈する唯一の正当な方法は［…］、著作活動について彼自身が書いたもの［journal や『わが著作活動の視点』など］から取りかかり、そしてそれから、彼の創作品を全体として理解するために、さまざまな作品を通じて、彼とともに前へ向けて生き、後ろへ向けて理解しようと努めることである」（Ibid., p. 21）。

[16] 玉林憲義、久山康編訳『キェルケゴールの日記』、弘文堂、1949年。

[17] 橋本淳訳『セーレン・キェルケゴールの日誌』、未来社、1985年。

[18] キェルケゴール研究者フェンガーは、キェルケゴールの journal の中にさまざまなフィクションが混入しているという事実を前に、journal をゲーテの『若きウェルテルの悩み』（当時のデンマークで流行していたという）に範を得た書簡体小説の一種と見なしたのだが、それは journal の文学性という特質を正確にとらえた見解だったと見ることができる。もちろん彼の場合、それゆえに journal に根本的な不信の念を抱き、どこにも「本当のキェルケゴール」を見つけることができないと嘆

いたのではあったが（Henning Fenger, *Kierkegaard, The Myths and Their Origins: Studies in the Kierkegaardian Papers and Letters*, tr. by George C. Schoolfield, New Haven and London: Yale University Press, 1980参照）。